

2010年1月26日

硫黄島航空基地視察報告書

党沖縄基地問題対策PT

座長 照屋 寛徳

副座長 山内 徳信

1. 視察目的

昨年11月25日、社民党は、第二回緊急提言でグアムとともに硫黄島を提起した。その後、普天間問題は大きな政局となり、与党3党による「沖縄基地問題検討委員会」が設置されたが、「検討委」では、2月第2週を目途に3党から移設案を持ち寄ることになっている。そこで今回、党から提起する案として硫黄島が適切かどうか、現地を見て確認する必要があると思い、視察を決定した。

2. 視察日時

2010年1月21日（木）、22日（金） ※航空自衛隊C-130輸送機にて

3. 主な視察日程

◆海上自衛隊硫黄島航空基地（航空自衛隊硫黄島分屯基地）視察

◆同基地内におけるブリーフィング（島内概況説明）

◆硫黄島島内視察（戦跡含む）

いわゆる現場主義に基づく視察。「百聞は一見に如かず」の言葉どおり、文献や伝聞で得た情報とは印象を別にし、認識を新たにすることが多くあった。

4. 所見（視察概要）

視察の結果、以下の5点から照屋・山内両名は、米軍の運用条件、生活環境条件を満たせるものではなく、普天間飛行場の硫黄島への移設は取り下げるべきだとの結論に至った。その旨、当PTに提起するものである。

(1) 隆起活動（活火山）の影響について

硫黄島は単に自衛隊の駐屯している無人島ではなく、今なお火山活動（隆起活動）を続ける「生きている島」、「揺れている島」である。岸壁（軍港）設置は不可能で、滑走路のひび割れや歪みも激しい。島内の至る所から吹き出す硫黄成分と潮風のため施設の劣化も早い。日常的に補修が必要で維持管理コストが莫大にかかる。

(2) ライフライン、通信インフラの整備状況について

ライフライン（水、電気、ガス）確保が難しい。水は滑走路に溜まった雨水を貯水、浄化して使用しており、過去の渇水時には隊員を本土へ引き上げさせたほどである。また、電気はディーゼル発電で、大量のプロパンガスボンベを本土から輸送している状況だ。

通信機能も乏しい。携帯電話やインターネットはもちろん繋がらない。業務用のネッ

ト回線だけは繋げてあるが、それも回線数が少なく、送受信できる容量も極めて小さい。メールを送るのに半日かかることもあるという。隊員は家族や友人・恋人に公衆電話で連絡しており、FAX 1 枚送るのにも一苦勞な状態だ。

(3) 戦後処理（遺骨収集、不発弾処理）について

今なお、遺骨と不発弾が地中で無数に眠っており、戦後処理が済んでいないこと、交通手段が事実上、自衛隊機による輸送に限られていることから、昭和 59 年に小笠原振興審議会が「一般住民の定住は困難である」との政府方針を結論づけている。海兵隊が移駐しても、その家族は暮らせる環境にない。

(4) ヘリ訓練機能移転の可能性、地上訓練場の確保について

普天間飛行場ヘリ部隊の訓練機能の一部移転についても難しいものがある。硫黄島と東京、沖縄は、それぞれほぼ等距離にある。基地周辺住民の負担軽減のための政治決定で、平成 3 年より厚木や横田の NLP（夜間離発着訓練）を含む FCLP（空母艦載機離着陸訓練）が実施されているが、移動距離があり過ぎるので米軍はやりたがらない。天候不良や滑走路の状態の悪さを理由にしては、厚木や横田で訓練しているのが実状だ。他方、硫黄島やその周辺には、地上訓練ができる島がない。

(5) 海兵隊の生活環境（QOL）整備について

赴任自衛官の息抜き、娯楽に供する既存施設は体育館やプール、テニスコートがある程度。売店は 2, 3 日に一度、半日程度の開店で、理容室（床屋）も月に 3 日の営業である。自動販売機は 1 機しか確認できなかった。また、常駐の女性自衛官は一人もいない。理由を聞いたら「生活する上で、あまりにも環境、条件が厳しい」とのことだった。海兵隊を移駐させるとなると、新たに町を一つ造る覚悟で施設整備をやらねばならない。

【参考】ブリーフィング時の主な Q&A（同基地トップ掘司令とのやり取り）

普天間の移設先候補として（施設整備、基地機能等）

Q：昨年11月末、普天間飛行場の移設先として社民党が硫黄島を提起したことを承知しているか。政府、あるいは本省から何らかの連絡、通達等があったのか。

A：報道で知って驚いた。

Q：2005年の米軍再編「中間報告」の前後に翁長那覇市長が提案している。防衛省として検討した経緯はあるのか、承知しているか。

A：初耳である。（同席者全員）

Q：隆起活動や硫黄ガス発生などの環境にもかかわらず、なぜ駐屯を決めたのか。撤退する話はないのか。

A：排他的経済水域（EEZ）の圏域確保の観点から有用な場所。旧軍の駐屯や米軍占領の素地もある。一方で、漁船の搜索や救難、何より小笠原諸島住民の救急搬送は我々の重要任務。撤退という話にはならない。

硫黄島の運用状況について

Q：南硫黄島、北硫黄島では何らかの訓練は実施されているのか。

A：していない。訓練空域は設定されているが、硫黄島にも南北硫黄島にも訓練場はない。南硫黄島は島全体が天然記念物のようなもので、立ち入ることも許されない。

Q：平行誘導路（緊急滑走路）はどのような時に使用されるのか。実際に使用されたことはあるのか。

A：補修工事や訓練などで主滑走路が使えなることが多いので、頻繁に使用している。ただ、主滑走路と比べて幅が狭いので輸送機の離着陸は難しい。

Q：海上自衛隊の艦船や米揚陸艦が立ち寄ることはあるのか？

A：物資を運び込む輸送艦は定期便がある。岸壁がないので、沖合にブイを4つ並べて係留し、ホーバークラフトで揚陸させている。米揚陸艦が来ることはない。あったとしても日米合同慰霊祭の時に支援に来る程度。

自衛官の生活環境等について

Q：隊員の平均年齢、平均赴任期間は。

A：海自は40歳、空自は37歳程度。陸海問わず赴任期間は基本的に2年。全国から隊員が集まる。

Q：自衛官の赴任期間、休暇の頻度、余暇の過ごし方、娯楽について。本土に定期的に帰ったりしているのか。携帯の電波も届かない中、若い自衛官には劣悪な環境であるが、どのように士気(モチベーション)を保っているのか。

A：ケータイもネットも繋がらない。テレビもBS放送しか見られない。一番の楽しみは本土に帰ること。多くは月に1度、そうでない人でも3ヶ月に1度は帰省している。こちらでの余暇はサークル活動に励む者が多い。阿波踊りやエイサーなどをやって小笠原村との交流などで披露している。ストレス発散にジョギングする者も多い。

Q：島に滞在している唯一の女性は米国の気象予報士と聞いたが事実関係は如何に。

A：常駐している女性自衛官は一人もいない。訓練や工事関係で一時的に来島することはある。

参加者：照屋寛徳衆議院議員、山内徳信参議院議員、秘書・塚田大海志、秘書・森木亮太

協力：堀博幸司令（海上自衛隊硫黄島航空基地隊司令一等海佐）、

赤瀬正洋（防衛省大臣官房参事官）、

村上隆英（防衛省海上幕僚監部防衛部施設課長）、

和田 他硫黄島隊員の皆さん

(敬称略)

地面の隆起によりパイプラインに亀裂が入る危険性大



補修してもすぐにゆがみ、段差が生じる滑走路（＝メンテナンスコスト大、離発着の危険性大）



ライフラインの確保が死活問題

貯水池



ゴミ処理施設



石油タンク



パイプラインのすぐ近くで噴煙

